出品リスト／List of Works［Exhibition］

Zone 1　Heavy Pop
「これまで」を「これから」へつなぐために

1-01　クラウン　crown
2021年／H60.6×W50.6cm／ドローイング、紙
個人蔵　Private collection

1-02　直線に並ばない子は悪い子、美しい子
A Child Who Doesn't Line Up in a Straight Line is a Bad Child, a Beautiful Child
2023年／可変／風船
作家蔵　Collection of the artist

1-03　空へ2　To the Sky 2
2022年／可変／風船、砲弾の破片
作家蔵　Collection of the artist

1-04　ヘヴィー・ポップ　Heavy Pop
2023年／H60.6×W50.6 cm／ドローイング、紙
個人蔵　Private collection

1-05　オキナワ・ポップ　Okinawa Pop
2023年／カーテン
作家蔵　Collection of the artist

1-06-11　失ったもの（売ってます）
missing (for sale)
2023年
作家蔵　Collection of the artist

1-12　沖縄県立博物館・美術館
Okinawa Prefectural Museum and Art Museum
2023年／クチャ
作家蔵　Collection of the artist

Zone 2　You Me
あなたとわたしがいる世界

2-01　Wings
2023年／ダイヤモンド、ブラックダイヤモンド、18金
作家蔵　Collection of the artist
Supported by Jewelry NARUMI

2-02　夜明け　Dawn
2009-2011年／H28.0×W18.5cm 8枚組
インクジェットCプリント
個人蔵　Private collection

2-03　私は沖縄　I am Okinawa
2021年／可変／ミクストメディア
作家蔵　Collection of the artist

2-04　儲キティクーヨー、手紙ヤアトカラ、銭カラドサキドー 2008
Earn Lots of Money. No Need to Write Any Letters, Just Send Home the Money First 2008
2008年／可変／映像インスタレーション
金沢21世紀美術館
21st Century Museum of Contemporary Art,Kanazawa

2-05　来るべき世界に　For the World to Come
2004年／ピザの箱（H41.2×W40.4×D4.2cm）
大和コレクション　Daiwa collection

2-06　HOPE
2023年／H190.0×W3.5×D3.5cm／棒にステッカー
作家蔵　Collection of the artist

2-07　自分のこと、あなたのこと
It's about me, it's about you
2015年／各H54.6×W80.0cm／新聞
作家蔵　Collection of the artist

2-08　自分にできることをする：声
（ニューヨークタイムズ　2011年3月14日）
Minding My Own Business: Voice
(New York Times 3/14/2011)
2011年／H19.0×W32.38×D32.38cm／新聞
金沢21世紀美術館
Collection of the 21st Century
Museum of Contemporary Art, Kanazawa

2-09　自分にできることをする
（ニューヨークタイムズ 2015年8月17日）
Minding My Own Business (New York Times 8/17/2015)
2015年／H40.6×W32.38×D32.38cm／新聞
作家蔵　Collection of the artist

2-10　自分にできることをする
（ニューヨークタイムズ　2013年5月26日）
Minding My Own Business
(New York Times 5/26/2013)
2014年／H40.6×W32.38×D32.38cm／新聞
作家蔵　Collection of the artist

2-11　自分にできることをする
（ニューヨークタイムズ　2013年7月31日）
Minding My Own Business
(New York Times 7/31/2013)
2014年／H40.6×W32.38×D32.38cm／新聞
作家蔵　Collection of the artist

2-12　お父さんの好きなゲーム
（天と地をひっくり返し競争）
My Father's Favorite Game (flipping earth and sky)
2018年／可変
作家蔵　Collection of the artist

［Chapter1 展示］解説

Zone 1

p.10 | 1-01 | クラウン

照屋にとって自由、個人、今の象徴で本展の重要な要素であるポップな風船が、最初の作品群として来場者を導く。基地のフェンスはメビウスの輪のようにずっと沖縄にあるように感じられるが、その分断の象徴も、自由、個の尊厳、そして今を尊ぶ風船が集まることで、いつしかふわぁと持ち上げられていく。

p.11 | 1-02 | 直線に並ばない子は悪い子、美しい子

揺られている風船は、天井を這うようにふらふらし、直線には並べない。でも、もしも教室や廊下の窓から外へ飛び出たら、空へ、上へ上へと勇敢に登っていく。空には直線はない。もともと直線がない環境で遠くへ行く潜在能力。それは私たちも一緒ではないだろうか。

p.12 | 1-03 | 空へ2

目の前に浮く鉄片は4人に1人を殺傷した沖縄戦の武器。凶器の形でも意地悪そうな顔でもなく石のふりして今も畑や茂みでひっそりと風化を待っている。風船たちは鉄を見つけては持ち上げ、証言させようとする。鉄片は何を語るだろう？鉄片の元を辿った誰かも証言という責任を風化させようとしている。

p.12 | 1-04 | ヘヴィー・ポップ

カラフルな風船を画面いっぱいに描いた水彩画。風船は本展の象徴的モチーフで、ヘヴィーな過去と現在をはるか遠くの未来まで運ぶ。米軍機の飛行停止と普天間の空の自由を求めて風船をあげた「カマドゥー小たちの集い」の女性たちの活動に出会って以降、照屋にとって風船は自由や未来の象徴となった。

p.13 | 1-05 | オキナワ・ポップ

風船というテーマを建築的にも展開。床から天井へと止まることなく上昇する風船たちで壁が滝のようにも見えてくる。カーテンという見慣れた造形とポップな風船にダイナミズムが満ちている。多くの苦悩を抱えた土地の上に建つ美術館への希望、そして絶えないエネルギーを保障するステートメントである。

p.14 | 1-06～11 | 失ったもの（売ってます）

戦跡やガマで遺骨・遺品の収集と平和教育を行う松永光雄の協力で遺品の展示販売を行うプロジェクト。失った部分を想像することに価値を見出す試み。陳列されたかけらは失った部分や失った人々を想像する手がかりであり、過去を思う価値観が値段となる。表示価格は第二次世界大戦の日本関連年代や戦没者数の数字になっている。

p.15 | 1-12 | 沖縄県立博物館・美術館

歴史を保存する博物館と表現を追求する美術館の複合施設において、歴史の当事者性を認めることが沖縄の美術館の役割との信念のもとサイトスペシフィックアートとして提案。手捻りで造った器は糸満の戦跡ガマから採取されたクチャ土に手を加えることで試みた過去とのコミュニケーションと癒しでもある。

Zone 2

p.17 | あなた／私

沖縄タイムス社とコラボした告知なしの創刊70周年記念ゲリラアートプロジェクト。辺野古の海や高江の森を水彩画で描き、新聞紙に印刷。照屋は「海と森はあなた／私を映す。私たちが自然と1対1で、何ができるのか、何をしてきたのかを確認する鏡でもある」と語る。

p.18 | 2-02 | 夜明け

機能美を問う作品。蛹がついたハイヒールは履物としての機能美よりも、蝶々を羽化させる機能美に変わっていく。美しさや素材を追求するブランドに対して、今後、他者（自然・動物・昆虫）と環境との共存性もブランド作りの一つではという提案が含まれている。

p.19 | 2-01 | Wings (Dawn)

照屋はオオゴマダラの蛹を最初に見た時ジュエリーのようだと衝撃を受けた。既存のデザインされた機能美に着眼してきた〈Dawn〉シリーズが、NARUMIの協力を得てジュエリーそのものへ展開。ジュエリーとなった黄金に輝く蛹のぬけがらから、夜明けと共に空へと飛び立った蝶の姿を想像させる。

p.19 | 2-03 | 私は沖縄

キッチンペーパーの着物の内側にフライパン、まな板、おたま、ほうき、スコップ、ハエ取りといった道具と一緒にチェーンとワイヤーカッターが吊される。毎日の家事に追われる中で「このままでよいのか、私も声を上げなきゃいけないのでは」と葛藤する。沖縄の民主化運動は生活と地続きになっている。

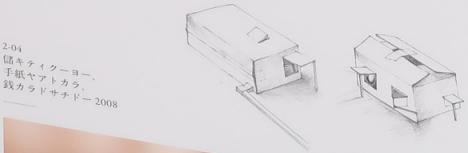
p.20-21 | 2-05 | 来るべき世界に

2004年の沖国大米軍ヘリ墜落事件で米軍が占拠した墜落現場はピザの配達人だけが立入を許された。照屋は墜落現場の写生大会を企画。子どもたちや家族連れなど100名以上の参加者が、ピザ箱（基地内のピザハウスの箱とニューヨークタイムズの記事を元にデザイン）の内側に墜落現場で感じた情景を描き込んだ。

1-05
Okinawa Pop

1-03
空へ 2

1-04
Heavy Pop



2-04
儲キチィクーヨー、
手紙ヤアトカラ、
銭カラドサチドー 2008

2-06
HOPE

2-07
It's about me, it's about you

# Heavy な世界でいきる Pop
## ——照屋勇賢と沖縄

大城さゆり
沖縄県立博物館・美術館学芸員

### 1　はじめに

沖縄出身でニューヨーク、次いでベルリンに拠点を構えて制作してきた照屋勇賢（1973－）は、琉球・沖縄の歴史をふまえ、尚且つ米軍由来の問題に悩まされ、日本と米国の思惑のもと民意が反故にされるような苦しい沖縄の現状をテーマに据えながらも、ユーモアに富んだ表現でもって、心に迫る、あるいは気づきを与える作品を制作する。沖縄の人々はその作品から元気や勇気を得て、世界に飛び出し活躍する照屋の勇姿を応援してきた。照屋の作品を紹介することは、未来のためのエンパワーメントであると確信して開催するのが本展「OKINAWA HEAVY POP」である。

照屋は、これまでポップアートの要素を持つ作家としてたびたび言及されてきた。[*01] だが、本展のために照屋と対話を重ねるなかで、政治的なテーマを含み、大衆文化のみならず地球に暮らす人間以外の存在にまで視野を広げる照屋の表現は、「ポップと言うには重すぎる」のではという話が出た。そこから照屋が「Heavy Pop」とロゴする、維持していくような「解決」のテーマ作業に沖縄の状況そのものを盛り込んだ作品が「OKINAWA HEAVY POP」が本展の核となる言葉になっていった。絵画を超えた絵画である照屋勇賢による、今、この沖縄でしか実現できない展覧会である。

### 2　沖縄を届ける

照屋は「復帰」の翌年1973年に生まれ、沖縄本島南部の南風原町津嘉山（つかざん）に育つ。近年は那覇市のベッドタウンとして開発が進むが、元々は畑に囲まれ、小川が流れ、北東部には小高い丘陵地・高津嘉山（たかつかざん）を擁する農村地帯である。綱引きなどの地域行事や芸能も盛んで、戦後沖縄の代表的な建築家・金城信吉や、御本家・金城哲夫といった、多くの文化人を輩出している。

照屋の育った1970~80年代にかけての沖縄は、未だ公立の美術館はなかったものの、数々のギャラリーがオープンした時期で、母・久子が各地のギャラリーへ照屋を連れていったという。やんばる（沖縄本島北部地域）の自然保護活動にも参加していた母親と、照屋を育んだ地域文化は、作品のテーマに深い影響を与えている。

優れた美術教育者やアーティストとの出会いも、照屋がアーティストを目指す大事な契機であっただろう。抽象表現を主とした画家・山城見信が主宰する「漫々茅絵画塾（まんまんちゃえ）」へ小学生の頃から通い、沖縄県立開邦高校芸術科美術コースへと進学する。そこで出会った恩師・翁長直樹（のちに沖縄県立博物館・美術館副館長）との